

# 春の軍隊

小松左京

# 春の軍隊

小松左京



新潮社版

はる ぐん たい  
春 の 軍隊

昭和49年4月10日印刷

昭和49年4月15日発行

定価 680円

著者 小松左京

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71  
電話東京 (03) 260-1111  
振替東京 808番  
郵便番号 162

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© Sakyō Komatsu, 1974 Printed in Japan.

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目次

|                                           |        |                  |             |        |        |
|-------------------------------------------|--------|------------------|-------------|--------|--------|
| 小<br>夜<br>時<br>雨<br>（<br>た<br>ぬ<br>き<br>） | 鷺<br>娘 | 春<br>の<br>軍<br>隊 | 共<br>喰<br>い | 遷<br>都 | 悪<br>霊 |
| 5                                         | 33     | 79               | 113         | 161    | 223    |

装画  
松本文子

# 春の軍隊



小夜時雨（たぬき）

大阪出身の粹人三田純一さんのつくった落語に、「豆狸」というのがある。

むかし——といっても、時代はさだかでないが、江戸であらう——の大阪の下町生活の雰囲気のある側面が、実によく出ていて、しかも話のできぐあいも傑作なのだが、まだ高座にかけられた事はない。桂米朝師匠がこの話に惚れこんで、ぜひやらせてほしいと三田さんにたのみこみ、あたためている所である。

米朝さんからのまたぎにすぎないが、話のすじはこうである。

——大阪道頓堀の芝居に出ている下っ端の役者が、芝居のはねたあと、雨のしよほしよほ降る、さびしい秋の夜更け、一人で三寺町かどこかの自宅へかえってくる。唐傘をさして、暗い坂道にさしかかると、榎の太木の下を通る時、傘がずっしりと重くなる。

そのころの、大阪の市井人の生活感覚から、役者はすぐ、これは狸のいたずらだな、とさとつた。——荒事専門の役者だから、それなりに度胸もすわっている。ますます重くなる傘をこらえながら、呼吸をはかって、やつ、とうしろトンボをきると、ギヤツという声が出て、そのあと傘がすうっと軽くなったので、そのまま役者は家へかえった。

下っ端役者などは、芝居だけでは到底食えないので、家では女房と一緒に、膏藥を売る内職を

していた。俗に「貝の膏藥」とよばれるもので、貝殻につめて売る、打ち身切り傷の藥である。

——ところが、狸の事件のあった晩の翌日から、その貝の膏藥の売り上げの中に、毎日一枚ずつ木の葉がまじっている……というのが話のあら筋の三分の二ほどの分量で、このあと、可憐な狸の死にいたる後段と話のさげが、いかにも大阪の下町むかしばなしらしいひょうげた哀愁がこもっていて、実にいいのだが、さげまで公開してしまうのは、原作者にも、これを高座にかけようと苦心している米朝師匠にも礼を失する事になるので、あとは、いつの日か読者諸賢が、この新作を寄席できかれる時までのたのしみという事にしておきたい。

所用あつて阿波徳島へ行く前夜、京都先斗町のMという飲み屋で飲んでいた時、その店の名物になつてゐる狸の置物をながめながら、ふとこの話を思い出した。

Mは、京のお惣菜風の肴と、夫婦狸の置物と——この置物も、最初は牝狸だけで、あとから掣取りをしたという、不思議な夫婦だが——おかみの元気な高笑い、それに年一度の「狸まつり」で、京都の中年初老の人たちに親しまれた店だが、このごろは東京人にもすっかり有名になり、せまい鉤形のカウンターも、一階二階の小屋敷も、いつ行つても満員で、少々はいりにくくなつてしまった。——だがその夜は、祇園祭の鉾巡幸も終つたあとの暑熱のせいかな、いつもならこつたがえす時刻なのにめずらしく二つ三つ席があいており、隅の方だが、ひさしぶりに腰をすえてのむ事ができた。

例によつて、狸にちよつと似た、愛嬌のあるおかみのきげんのいい高笑いをきき、背中を三つ四つどやされると、急に酔いがどつとまわるような気がした。——にわかに朦朧としてきた酔眼を店内にはせると、いやでも狸の置物が眼にとまる。するとまだ高座にかけられていないあの落

語の事が思い出され、同時に翌朝出かけて行く阿波の国が、「狸どころ」である事も思い出された。

なぜ——という事はない。「狸どころ」をたずねようとする前夜、夫婦狸の置物で有名な飲み屋でひさしぶりにゆっくり飲むことができた、という偶然がきっかけになったにすぎないのだが、むせかえるような真夏の暑気の中で、汗をかきながらひとりかたむけた熱燗の酔いもてつだって、突然、狸というものが、奇妙に不思議な、かついとおしい存在に思われてきた。

トーテムイズにかぎらず、「聖獣」の観念や、動植物崇拜、信仰の古い習俗は、世界各地どこにでもその痕跡は見られるのだが——それにしても、「狸」などという間のぬけた動物を、これほど親しみをこめて祭り、マスコットにしている地域がほかにあるだろうか？

しかも、草深い未開地域ならいざ知らず、GNP世界第二位というような高度工業国家で、そんなあほらしい事をやっている所がほかにあるか？

特に、「お狸さん」の信仰は、四国の阿波を中心にして、讃岐から京阪に濃い。——水商売の繁昌のシンボルなら、関東にもあるだろうが、全国的に見れば、狐——つまり稲荷信仰にくらべれば、ずっと限定されているようだ。

日本という国はおかしな国で、近代高層ビルのでっぺんにお稲荷さんの社をまつたりする。

——全オートメーションの近代工場の鍛入れ式や、コンピューターをつかった数十万トンのタンカーの進水式に神主さんがよばれるのだから、それも当然かも知れないが、日本全国をしらべてみると、いたる所で古い動物信仰が生きている。水神の蛇、竜、鰐鰯、犬、また牛頭天王や馬頭観音といった牛馬のたぐい、神の使いとしては、八咫鳥や白鷺、金色の鳶、日枝山王の猿、猪に

鹿、蛙や蝦蟇がまがえまでがその仲間にはいつているが、何といつても、稻荷信仰にのつてひろがった狐ほど、広範な勢力と高い格を持つてゐるものはない。——「正一位」という位の高さもさる事ながら、人間に祟りたた、あだする場合も、殷いんの紂王ちゆうわうの姫妃ききから、天竺てんじくは華陽夫人、さらに本邦にわたつて、日本をほろぼそうとする玉藻前たまものまえ、源翁げんのおう和尚に退治されて殺生石に化した金毛九尾の狐、といった具合に、はなはだすご味がある。「搜神記」「五雜俎」「聊齋志異」などの中国古伝にあらわれる狐も、觸腰どくようを頂いて北斗を拜せば人間に化け、狐の化けた美女は、男の精を吸つてこれを殺してしまふ。日本の信太妻しのだ、「葛の葉くず」伝説の方が、凄艶ながら、まだ哀愁があるというものだ。ヨーロッパの「狐ルナール」や「ライネッケ・フックス」でもずるがしこい獣の筆頭にあげられてゐるし——なにしろ、お稻荷さんが、インドの羅刹らせつの一つ、玄狐にのつて死にかけの人間の心臓をとつて食うというおそろしい茶枳尼天だきにてんと習合してから、そのすごさはぐつと陰にこもる迫力をました。それにひきかえ狸と来たら——。

そもそも同じイヌ科の動物ながら、狸の方は、狐や犬にくらべて、はるかに原始的な動物なのである。——顔つき体つき動作といったものから、いかにも間がぬけて、愛嬌のある印象をうけるが、それは何も外観だけの事ではない。事実、犬や狐にくらべれば、はるか知能が低く、警戒心がうすく、動作ものろい。道でばったりあった時、ワッ！ と大声でおどすと、びっくりして仮死状態をよそおう。これが俗にいう「狸寝入り」だが……、そもそもこんなのにきですご味のない動物を、「信仰」の対象にしてゐる所がほかにあるだろうか？

ヒンズー教や仏教の影響をうけた中国中近世の民話伝承では、動物植物何でも化けるから、たしか狸が坊主か何かに化けたような話も「聊齋志異」あたりにはあったような気がするが、こと

狸の化けた民話は、日本の各地方に圧倒的に多いように見える。——「カチカチ山」「文福茶釜」といった定型化された話ができるのは、中世以後だろうが、（その「文福茶釜」にした所が、もとは狐が化けた事になっており、それが狸にかえられてから、話にぐっと愛嬌が出てくる）草深い田舎で、狸が化けたの、豆狸まめだがいたずらしたのという話は無数につたわっている。その化け方やいたずらも愛嬌があつて、一つ目小僧や見越しの入道、のっぺら坊、あるいは小豆洗いの音をたてたり、雨戸をたたいたりといった、他愛のない所で、どこか間がぬけている。そのためか、近世以降に発達した落語の題材としては、狐よりずっと人気があり、狐の方が「王子の狐」と「七度狐」ぐらいいのに、狸の方は「狸賽たぬさい」「権兵衛狸」「狸化寺」「化物使い」と、その役どころもかなりいい。

それにしても、こののん気で間のぬけた動物を、「まもり神」にしてまつるというのはどういう事だろう？——現にこの先斗町の飲み屋Mにしても、夫婦狸は年に一度、多くの常連参加のもとに盛大な祭りが催され、一種の名物になっている。京都大阪の市中のあちこちには、まだ「狸」がすんでいたずらする、といわれる家や小路があり、食物をそなえたり、まつたりしている所もあり、時には狸をまつる「講」ができたりして、狸は古い「市井生活」の中で、いまだに共棲している。冒頭にあげた、三田さんの「豆狸」にもられた情感は、江戸時代のものというだけでなく、現代上方の都市生活の中に、まだ息づいているのだ……。

いったいお前さんは、上方人の生活にとって、どういう意味を持つてゐるんだね？ ええ、狸公……と、私は、すっかり朦朧もうろうとしてしまった酔眼をあげ、大臈丸げんたまをぶらさげた牡と、赤い腰巻きを巻いた牝の、夫婦狸の置物に、うやうやと話しかけた。……それに——狸がこんなに人気があ

るのは、どうやら明日出かける阿波徳島、讃岐あたりを中心に、京、大阪の古い都市部らしいが……なぜ、こういう地域で、特にお前さん方が人気があるんだろう？ お稻荷さんが商売の神様——そしてお前さん方は、特に水商売に人気があるらしいが、それはまたどうしてだ？ 太鼓腹をつき出し、大ぎんたまをぶらさげて、徳利をさげたその姿は、招き猫とならんで水商売に愛好されているが——猫は化けても神社に祭られないのに、お前さんたちは、淡路や徳島あたりでは神社に祭られているという。それはいったいなぜだ？ 明日徳島へ行って、ひまがあったら、そういう事をしらべてみようと思ってるんだが……どう思うね？

口の中でぶつぶつ言ってるのか、頭の中でうだうだ言ってるのか、自分でもわからないままに、とぼけた面をおおむけている狸の置物にむかって、盃を持った手を泳がせた。——もうすっかりへべのれけになっていて、あげた盃をふくもうとすると、口の方を持って行かなくてはならなかった。やっと酒をのどにながしこんだとともに、狸の置物が、ニヤッ、と笑ったような気がした。あ、と思ったとたんに、狸の顔とおかみの顔がかさなった。——あんた、どないしたん？ という声と、びんびんびく高笑いをききながら、私はカウスターに顔をつつぷし、完全につぶれてしまった。

## 二

体が何となくゆれる、と思ったら、眼の前に緑色の濁った波がせまって来た。——その波がついと横へ流れると、波頭が白くくだけて、また次の波がくる。

頬をうつ潮くさい風に、やっとわれにかえると、船の欄干らんかんにもたれているのがわかった。——腫れ上った眼を、むりやりひらいて、まわりを見まわすと、どうやら関西汽船の上らしい。昨夜、先斗町で正体なく酔いつぶれ、それからどうやって朝まで時間をすごし、どうやって大阪弁天島までたどりついたのやら、皆目記憶がない。切符を持っていたのはたしかだが、どうも家へかえっていないらしく、服装はきのうのまま、髪はくしゃくしゃ、顔は面をかぶったようにべっとり脂でおおわれ、汗でぬれたカッターの襟えりはだけ、ネクタイの結び目は鳩尾なまこのあたりにあり、それでも書類のはいったバッグは後生大事に右手にぶらさげていた。

船は、もう寄港地の神戸を出て、コースを南西にとっていているらしい。右手船尾の方に、須磨、舞子あたりとおぼしき市街が遠ざかりつつあり、眼前に緑におおわれた淡路の島山がすぎて行く。——七月の陽光がカッと海面に照りつけ、波頭の反射のまぶしさに思わず眼をつぶった。ひどいふつか酔いで頭がわれるように痛む。船が少しゆれると、のどの奥から、苦い胆汁がぐうっとこみ上げて来て、胃が二つ三つ、空えずきにええき上げる。苦しさのあまり、見栄も外聞もなくうなっている。

「まあ、ええおのどやこと……」

まるい、はなやかな声が、すぐ傍でした。

え？——と思って、私はうす目をあけた。人が苦しがつてうなっているのに、ひどい皮肉をいうやつがいるものだ、といささかおどろいたのである。

すぐ左手に、すずしげな紺この着物を着た。色のぬけるほど白い、まるぼちゃの中年女性が、欄干にもたれて扇子をつかっていた。——扇子の骨の、白檀びやくだんの香りが潮風にのってぶんとにおい、

体を動かすと、伽羅きやろの香がまじる。宿醉ふっかよいにこんなにおいのかげば、たちまち吐き気がするのだが、この時はどういふわけか、その香りをかいだとたんに、頭の中に涼しい風が吹きこんだように、にわかに気分がさわやかになった。

「お年のわりに——あ、ごめんやす——えろう粹すいな唄うたご存知でんな」

「なんの事です？」私は眼をぱちくりさせた。「私は何も……」

「『小夜時雨』……ええ地唄でつけど、このごろこんなもの、お座敷でおやりになるお方も、ほんめずらしゅうなつてしもて……」

そういうと、その女性おんなは、白い、ゆたかなのをちよつとそらすようにして、

へ小夜時雨、時雨降る夜も笠着て通わんせ……神無月にもただ通う……

と、小さな声でうたいはじめた。——小さいながら歌いこんだ、張りのあるいい声だった。

あとになつて考えてみると、この歌を、一度か二度、酒席できいたような気もするが、根が無器用の半音痴はんおんちのくせに、どこでおぼえていたのか、

へ文で待てとや、待たるるよりも、待つがつらいか、煙りが憂うれいか……

と、口をあわせていたのは、われながら不思議だった。

丸ぼちやの女性おんなは、大きな丸い、ちよつと茶目ちやめつ気のある眼で、にこつ、と笑つて、チントン、と口三味線くさんみせんで合の手を入れ、

へ辛気枕しんきまくらの空寝そらね入り……

とうたつて、ふいに途中で歌をやめ、

「ほれ、ここん所でんがな」

といつて、ころころという感じの笑い声をたてた。

「ここ……がどうしました？」

「いえ、うちがふりをつけると、お客さんが、いつもここの所で、はまりすぎやいうて笑わはつて……」

時雨降る夜、恋人を待つ間を狸寝りする女の事を歌ったもので、そこからこの三下り端唄が「たぬき」とよばれる事を、彼女は手短かに説明してくれた。

「邦楽で『たぬき』という題のついたものは、地唄で二つ、長唄に一つありますけど、これがやっぱり、一番地唄らしゅうて、よろしおますな。——鶴山勾当つるやまこうとうの曲やいうから古いもんですし……そやけど、うちがやったら——ほれ、こないにころころしてまっしゃろ。そやさかいに、こんなしんみりしたもンも、作物さくもんみたいになつてしまふ、いわはりますねん」

そういつて、その女性おんなは、扇子を舞扇のように持つて袖を張り、くるりときれいにまわつて、ちよつときまつて見せた。——そのきまりのあざやかさに、はっ、と息をのむ思いをしたが、きまつたとたん、その茶目ちやめつ氣たつぷりなまゐる眼を、くるくるとまわして見せたので、逆に吹き出してしまい、思わず手をたいた。大きな、明るい眼、きれいな弧を描く眉、練絹のような白い肌、と見れば、まあ美人の部類にはいらなくてもない。が、それ以上に、まゐる鼻、二重になつたくれ顎あご、それにいつも笑いをふくんだ唇もとど、おかしそうによく動く瞳に愛嬌あいけうがありすぎて、見ただけでこちらの頬がゆるんでしまふ。——そんな女性おんなだった。

どこもかしこもまるい、ぼちゃぼちゃした体つきで、上等の細の着物の裾には、うす墨で萩に尾花をあしらひ、これも安くなきそんな金茶の羅の帯には、薄雲が織り出されていて、背の所に